



南郷

札幌市立南郷小学校 学校だより 第2号
令和7年 4月30日

【学校電話】011-861-9305

【学校ホームページ】

<http://www.nango-e.sapporo-c.ed.jp/>

個性を豊かに…自己肯定感が支える

校長 関根 治彦

先日教室を回っていると、ある子に「校長先生、アニメ何を見てるの？」と聞かれました。「昔はアニメをよく見ていたけど、今はあまり見ないかな〜。」「何を見ていたの?」「ドラえもんとか、ガンダムとか、マクロスとか…。」いつの間にか何人もの子どもたちが集まり、アニメ話に花を咲かせているときに、アニメのキャラクターのものまねの話になりました。私が「ぼく、ドラえもんです。」というものまねをすると「ドラえもんはそんな声じゃないよ。」「そうだ〜。」と一斉攻撃を受けてしまいました。私が子どもの頃に見ていたドラえもんの声は大山のぶ代さんという声優さんでした。今は水田わさびさんと言う方だそうで、2005年に交代していました。つまり20年も前に交代をしているのです。それだもの、子どもたちが知るわけはない。えっ、ひょっとしたら保護者の中にも大山のぶ代さんの声のドラえもんを知らない方がいるのではないかなと自分の年齢を痛感させられることになりました。

昨年、大山のぶ代さんが御逝去されました。御逝去されたときテレビでは特番が組まれ、生前のインタビューなどが放送されていました。たまたま番組を見ていた私は、その話にとっても感銘を受けたのでした。それは以下のような話でした。

「私は小さい頃、本当によくしゃべる女の子でした。いつまでもしゃべっているので母は、『静かにしないとおやつ抜きだよ。』と言ったくらいです。でも、中学生になったとき、クラスの子が、『大山がしゃべったら、声の真似をしよう。』という陰の約束をしていたようです。私が話をすると、誰かが、教室のどこかで、私の特徴ある声を真似するのです。つまりからかいが始まったのです。それから私は、だんだんしゃべらなくなっていきました。それを見て変に感じた母が『どうしたの?』と私のつらさに気付いてくれたので話をしました。すると母は『声が変わだからといって、その弱みをかばってばかりいたら、もっと弱くなってしまうよ。もっと声を出すようなクラブに入ってみたら?』と私を奮起させてくれたのです。その後、私は放送委員会に入り、演劇部に入り、今は声優として『ドラえもん』をやらせてもらっています。母の言葉、個性を生かすというアドバイスがあったから、前向きに生きる今の私があります。』

大山さんは自分のコンプレックスを母の励ましで乗り越えられたと語っていました。自分に対して自信をなくしてしまっていた大山さんを奮い立たせ、個性磨きができるほどに自己肯定感を高めたのはお母さんです。「こんな親になりたいものだ。」と、お母さんに尊敬の念を抱きました。また、その一言で奮起し、自分の個性に気づき、奮起した大山さんもすごい人だと思い、自伝(エッセイ)を買って読んでしまいました。

ただ、私はそもそも、人の個性を笑いものにしたり、見下したりするという行為を許せません。そして、そういう行為をする人をかわいそうな人だと思います。「そんなつもりはなかった。」「ちょっとした冗談。」そんなもので済まされないと。個性は豊かなもの、磨いていくものであって、笑いものではないのです。

大山さんのように、自分の個性を磨いていくためには、『ありのままの自分を受け入れていく』自己肯定感が高くなければなりません。逆に自己肯定感が低い人の表れとして、「違いを許容できない。」「他の人をさげすむ。」などがあります。私がそういう行為をする人がかわいそうな人と言った理由はそこにあります。その人たちはきっと自分の個性に気づき、磨いていくことが難しいはず。そう自己肯定感を高く保つことは本当に大切なのです。昨年度の札幌市の共通指標で本校児童の自己肯定感に関わる数値が肯定的な回答が90%と大幅に改善し、教職員一同、大変喜んでます。そして、先日教室を回っているときに、図工の作品を見合う授業に遭遇しました。「〇〇さんの描いたこのアサガオとてもきれい。」「〇〇さんの海の色、私はとても好き。」という言葉が飛び交っていました。そして、そこに先生が「友達のそんな素敵なおところを見付けられるなんてすごいね。」という声掛けがなされていました。自己肯定感を高めるとは、こういう日常の中で育まれていくものだとうれしく思いました。そして、願わくば地域、保護者そして学校が協力して、子どもたちにそのような日常を提供していきたいものだと願わずにはいられなくなりました。